



身もこがれつつ

最終回は、どちらかというとしブイめの歌が多いかもしれない。その中に、百人一首の撰者、藤原定家の歌が入っている。

○来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに
焼くや藻塩の身もこがれつつ

この歌では、序詞、掛詞、縁語といったテクニクが使われているので、先ずは今までの勉強の復習のつもりで、それらを指摘してみよう。結構難問だが、できるかな？

▼序詞＝「まつほの浦の～藻塩の」は「こがれ」を導く序詞。

▼掛詞＝「まつ」が「松」と「待つ」の掛詞、「こがれ」が「(焼き)こがれ」と「(恋い)こがれ」の掛詞。

▼縁語＝「藻塩」「こがれ」は「焼く」の縁語。

このほかに、この歌には「本歌取り」という技法が使われている。本歌取りとは、有名な作品の趣向や表現を生かしながら、新しい趣向を構成する技法で、本歌の内容をも歌の中に取り込むことができるために、一首により深くて豊かな内容を詠み込むことを可能にするものである。

では、この歌の本歌は何かというと、『万葉集』巻6の笠金村の長歌である。

「…淡路島 松帆の浦に 朝なぎに 玉藻刈りつつ 夕なぎに 藻塩焼きつつ 海人少女 ありとは聞けど 見にゆかむ よしのなければ ますらをの 心は無しに…」

本歌では男の歌になっているが、それを借りながら、恋人を待てども待てども現れないその女心のもどかしさ、恋にこがれる思いの切なさを歌ったのがこの歌である。

大岡信のこの歌の対する評を引用してみよ

う。「掛詞を巧みに歌の本質にとけこませつつ駆使して、さらでだに憂いを深める夕なぎの海を背景に、藻塩を焼く煙の立ちのぼる浦の、そのじりじりと燃える炎のような胸の火を、象徴的雰囲気の中に立ちのぼらせる。心は焦慮に狂わんばかりだが、言葉はあくまで優艶という造りになっていて、そのために一種の客観性が生じ、物語世界が構成される。円熟期の定家はこういう景情融合の雰囲気をつたって他の追従を許さなかった。」(『百人一首』講談社文庫)

*

さて、最後に紹介するのは、鎌倉幕府第三代将軍源実朝の歌。

○世の中は常にもがもな渚こぐ
あまの小舟の綱手かなしも

「もがも」は実現することが難しそうなことについての願望を表す終助詞、「な」は詠嘆も終助詞で、二句切れ。鎌倉あたりの海辺で目にした光景だろうか、渚の小さな舟が綱手(へさきについている舟を引くための綱)に引かれている…。この光景に、実朝は言い知れぬ生の哀感を覚えたのであろう(本歌があるが難しいので省略)。

鎌倉幕府を開いた源頼朝の次男で、「身もこがれつつ」の定家に歌を学んだ彼は、大海の磯もとどろに寄する波われて碎けて裂けて散るかも

という、迫力ある映像と軽快なリズムが結びついた歌も詠んでいる。しかし、甥の公暁によって二八歳の時に暗殺されてしまう。家集に『金槐和歌集』があり、勅撰集にも93首が入集した歌人であった。